

# 小学校外国語活動における小中連携の課題と方法

高野美千代\* 加藤 宏\*\*

Keys to the Transition of English Learning from Primary to Junior High School

TAKANO Michiyo, KATO Hiroshi

## Abstract

The starting year of obligatory English-language education has been lowered to the 5th grade, and the Ministry of Education is encouraging all primary schools to integrate English education with that given in junior high schools, in order to realize the greatest benefit for pupils. However, in reality English teaching is a difficult task for many primary school teachers, because English has not been a requirement of their teaching qualification. In this study, I suggest two simple and effective methods of teaching English to children for improving the four language skills of listening, speaking, reading, and writing. Developing four skills, rather than two, would help pupils with the transition of English learning from primary to junior high school.

Key words : 外国語活動、小中連携、小学校英語

## はじめに

日本の学校における英語教育は何を目指しているか。たびたび変わる方針に教育現場は翻弄される一方であるが、ことに小学校英語教育においては困難な状況が多いのではないか。早期英語教育が有効であることが認められたゆえに小学校5年生から外国語活動が必修化されたものの、その一方で中学英語の前倒しはできないとされる。コミュニケーション能力を養成すること（／コミュニケーション能力の素地を養うこと<sup>1)</sup>）が究極の目標であろうが、小学生に求められるコミュニケーション能力（／の素地）が具体的に「何」を指すのか、またどの程度のレベルを指すものであるか判断するのは容易ではない。

平成23年度からは年に35時間の外国語活動が必修化された。必修化されたことによって、たとえば研究指定校とそれ以外の学校間に存在した英語教育における格差は、是正あるいは緩和されることがいわば保証されるようになったと考えた

い。同時に、児童においては一定の教育効果が小学校卒業時までには得られるという点で、中学校英語へのよりスムーズな移行が期待できる体制が整ったことになる。

必修化が実現した現在、どのようにすれば小学校英語の最大限の効果が生まれるであろうか。小学校では子どもが英語に触れる時間数が増えたのであるが、ただ漫然と決められた時間を費やすことだけで相応の効果が生まれるとは考えられない。第一に必要なのは外国語活動と中学校英語科との有機的連携に根差した教育と言えよう。英語教育における小中連携は外国語活動必修化以前から大きな課題となっているが、実際に理想通りの連携を行うには多くの困難がある。組織として連携することの困難もあるが、子どもを中心に考えたとき、最も重要になるのは教育内容の連携になる。

平成25年4月の文部科学省による小学校6年生と中学校3年生を対象にした「全国学力テスト」

\* 山梨県立大学 国際政策学部 国際コミュニケーション学科

Department of International Studies and Communications, Faculty of Global Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

\*\* 山梨大学兼任講師

の際、英語についてのアンケートが実施された。その結果では、小学生のほうが中学生よりも英語の授業を好む割合が高いことが示された。児童生徒に対するアンケートで、「英語の学習は好きか」との問いに「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた小6は76%に上り、中3は53%であった。ともに半数を超えてはいるものの、その差は大きいと感じられる。<sup>2)</sup> 中学校においては4技能を駆使した英語学習を本格的に始めるのであるから、本来ならば中学入学後に英語学習の魅力に気づけたら理想的であろう。しかし実際のところは小学校英語のほうが子どもに意欲と自信を与えるものであり、学習の負担が大きい中学校英語については、肯定的にとらえられない生徒が多いことが推測できる。中学で英語嫌いが増えてしまうことはぜひ避けたい。中学で英語学習の楽しみを持続させるために小学校では何ができるだろうか。

本論考では、小学校外国語活動における小中連

携の現状をまず検討する。それをふまえて、連携を行う上での課題を指摘したい。さらに、小中連携を現実的にかつ効果的に行う方法として、小学校の外国語活動において導入できる英語学習法を具体的に提案する。そうすることによって、英語教育における小中連携の今後の可能性を示したい。<sup>3)</sup>

## 1. 小中連携の現状と課題

### 1-1. 小中連携の状況

全国の小中学校で英語教育における連携が進められているが、その度合いは様々である。文部科学省が発表した「平成23年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査（B票）の結果」によると、平成21年度から23年度までの取り組みについて、次のようなことがわかる。

まず、外国語教育に関し、小中連携に取り組んでいる（平成23年度については取り組みの計画がある）中学校区数は以下の通りである。

	平成21年度	平成22年度	平成23年度
中学校区総数	9,200	9,173	9,149
実施した（する）	5,102	5,810	6,623
全中学校区に占める割合	55.5%	63.3%	72.4%
実施しなかった	4,098	3,363	2,526

中学校区において、何らかの形で小中連携をしている割合が平成21年以来、年々増加していることが明らかに見て取ることができる。平成21年度の55.5%から、2年後の23年度には72.4%にまで上昇している。

つぎに、連携の内容についてであるが、外国語教育に関して小中連携を実施している中学校区で、ア～ウのそれぞれに取り組んでいる中学校区数は次のようになっている。

アの情報交換は、相互授業参観や年間指導計画

	平成21年度	平成22年度	平成23年度
ア、情報交換	4,191	4,925	5,678
取り組んでいる中学校区の割合	45.6%	53.7%	62.1%
イ、交流	3,375	3,978	4,584
取り組んでいる中学校区の割合	36.8%	48.4%	50.1%
ウ、小中連携カリキュラムの作成	543	787	1,122
取り組んでいる中学校区の割合	5.9%	8.6%	12.3%

の交換など、小学校と中学校の教員が互いの取り組みについての情報を交換したりすることを指している。今や過半数の中学校区で実施されていることになる。

イの交流とは、アをふまえて小中学校の教員が互いの学校で授業を行うことや、研究授業後に研究協議会、指導方法の検討会等を行うことが含まれる。これも増加傾向にあり、平成23年度にはほぼ半数の中学校区で実施が予定されている。

ウは外国語活動と中学校外国語科との連携したカリキュラムを作成するもので、こちらはまだやっと1割に達したところである。ウの連携は、アおよびイと比較して、時間も専門知識も必要とされ、当然簡単には実現に至らないと推測される。<sup>4)</sup> 英語教育は地域の実情に合わせて教える内容を比較的柔軟に調整できるとされているが、小中連携の内容についてある程度は文部科学省や地方の教育委員会が主導権を握って小中学校に対して基本的かつ具体的な指針を提示することは可能ではないだろうか。そうすることで現場の教員の負担を減らし、また確実に効率の良い教育を実現することにつながると考える。

### 1-2. 小中連携の実例と課題

小中連携が首尾よく進み、効果を上げているケースももちろん多く報告されている。例として北海道教育大学付属釧路小・中学校について触れておく。<sup>5)</sup> この連携は数年前の取り組みとなるため、すでに最新の例とは言えないかもしれない。しかし3年計画でカリキュラムレベルまでの連携を確立したプロセスは大変貴重な情報である。具体的には1年目を学校間の信頼関係を築く期間とし、相互授業参観や教員間の意思疎通を行う時期とする。2年目には連携を意識した授業を行うなど、連携内容や方向性を明確にし、少しずつ実践を始める時期と設定する。3年目に連携の基礎を確立し、小中一貫のカリキュラムを構築、その問題点や課題を洗い出す期間としている。つまり連携は時間をかけて行うべきものであるとの方針がわかる。

ただし、上の例は付属小・中学校であるため、

公立学校とは教員の置かれた環境が異なることに注意しなければならない。というのは、公立学校の場合は数年に一度は教員の異動が行われているため、連携に3年程度を費やすとなると計画の途中で各校の連携担当者の変更になることが避けられない。したがって、カリキュラムの連携までにレベルを上げていく場合には、共通認識を持つ複数名での対応ができるようにしておく必要がある。たとえば日頃から校内で勉強会を開いてコンセンサスを得ておくなどし、主担当教員の異動があっても連携の計画を継続できるような体制を整えることが必要となる。<sup>6)</sup>

## 2. 教育内容の連携

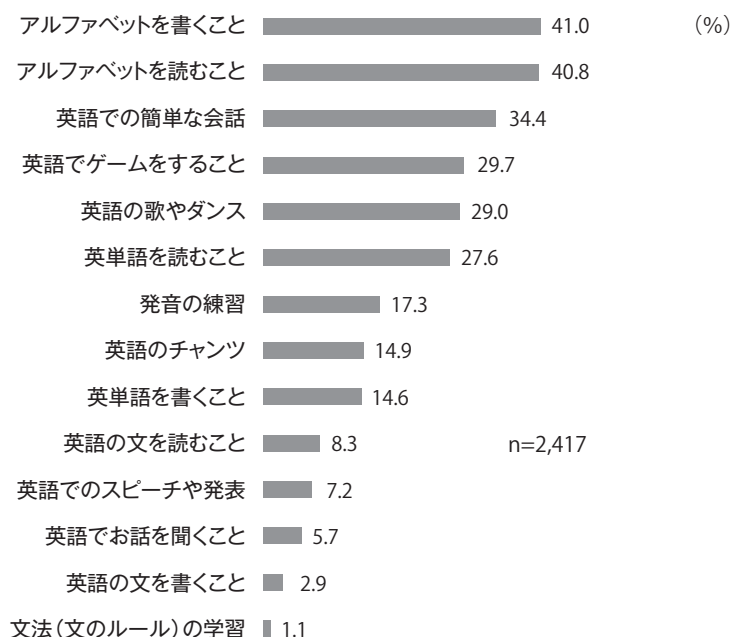
### 2-1. 小中連携の実情

ベネッセ教育研究開発センターが平成23年に実施した小学校英語に関するアンケートから、小学校の外国語（英語）活動の内容で中学校に入って役立ったことについて以下のような結果が出ている。<sup>7)</sup> 中学校入学後に小学校外国語活動がどのように効果を発揮しているのか興味深い内容がある。まず、外国語活動が中学校入学後に役立った部分について聞いたものである。

役立ったとされるものの1位、2位がアルファベットの読み書きである。アルファベットの読みについては小学校で教えることになっているが、書くことについては外国語（英語）活動では必須ではない。つまり書くことを習わずに中学校に入学する子どもが多くあったのは事実であるが、一方で中学校において役に立つのはやはり読み・書きの両方ということになる。逆に言えば、読み・書きの両方ができないと中学校英語科での負担感がより大きくなるということだろう。この調査が行われたのは平成23年で、調査の対象となった中学1年生は外国語活動年間35時間必修化前の世代である。学校間格差もあり、書くことについての経験はさまざまであったと考えられるが、4割の生徒がアルファベットの読み書きについて小学校の経験が活かされていると感じている。一方で、そもそもアルファベットの大文字小文字を書

Q. 中学校に入ってから役立ったと思うものを1位から3位まで選んで番号を記入してください。

図 2-1-5 中学校で役立ったと思うもの (MA/1位から3位までの合計)



※「小学校での英語の授業や活動は、あなたが何年生の時にありましたか。」という質問で、「小学校での英語の授業や活動はなかった」「わからない」を選択した回答者を除いた回答者のみ。

※数値は、各項目で1位から3位に回答があった度数の合計が、1位から3位に回答のあったのべ度数に占める比率。

かせることをすべての児童に課すのは負担が大きすぎる、という判断がある。学習指導要領からもそれが読み取れるが、文字指導が進んで行われていないのはそのためである。しかしながら、アンケート結果からも文字の読み・書きが実際には役に立つものであることは明らかに示されているのだから、将来的には小学校でも全員がせめてアルファベットを読み、そして書けるように指導を行うべきではないだろうか。「小学校卒業までにやっておきたかった」ことも、「英単語」の読み・書き、「英語の文を書くこと」が上位である。つぎにその項目の結果を示す。

次の調査結果に示されているのは、中学校に入ってから感じている、小学校の時点でやっておきたかった（けれどできなかった、あるいは不十分であった）事項である。「英単語を書くこと・読むこと」が上位に入っている。さらに「英語の文を書くこと・読むこと」も全体の4分の1の生徒が感じている項目である。小学校では文字を提示する形で単語を読ませたり、あるいは単語を書

かせる練習を行ったりすることを基本的にはしない。子どもたちはあくまでもイラストを頼りに音を聴き、そのまま復唱する形が主である。文字は音声によるコミュニケーションの補助として使用されるからである。

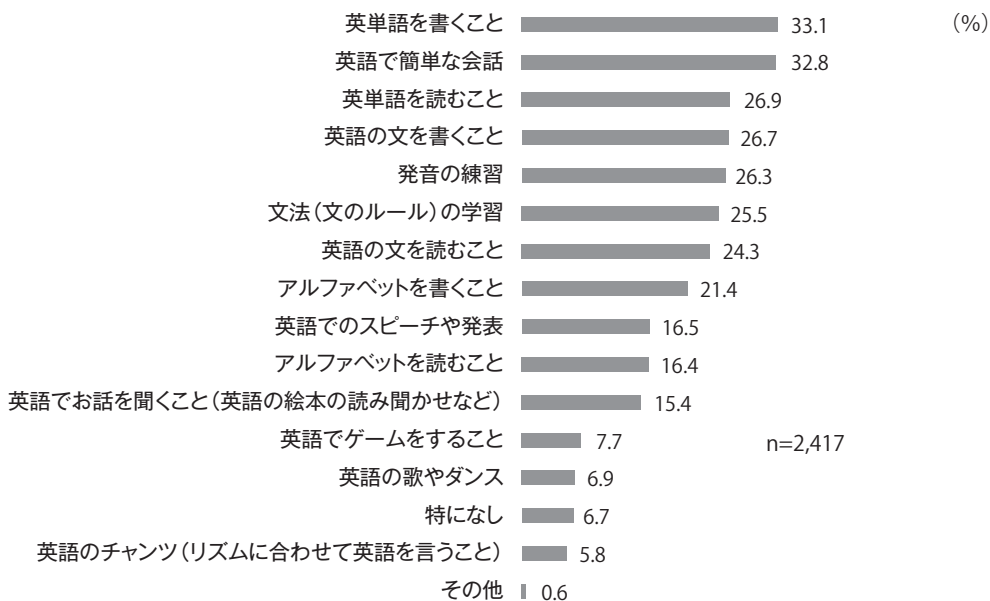
理想的には「4年生までにアルファベットを読み書きでき、5年生でフォニックス学習あるいは英語ではつづりと読み方が一致しないことを学習、6年生でやさしいものの中から知らない単語を読み、文字を書く練習も自由に行う」という意見もある。<sup>8)</sup> 中学英語へのスムーズな移行のためには必要な取り組みであると言えよう。研究指定校をはじめとする一部の学校ではこのような取り組みがすでに実践されつつある。喜ばしい反面、学校間格差が存在するのは外国語活動が必修となった現在でもそれ以前と同様に明白である。

小学校では4年次でローマ字を習うので（外国語活動教材の *Hi, friends!* では5年生で大文字、6年生で小文字を習得することになっているため）、4年次にアルファベットを読み書きできるようになることは多くの児童にとって可能であろう。5



Q. あなたが中学校に入ってから、小学校卒業までにやっておきたかったと思ったことはありますか。あてはまるものをすべて選んでください。

図 2-1-6 小学校卒業までにやっておきたかったと思ったこと (MA)



※ 「小学校での英語の授業や活動は、あなたが何年生の時にありましたか。」という質問で、「小学校での英語の授業や活動はなかった」「わからない」を選択した回答者を除いた回答者のみ。

年生でフォニックス学習を部分的に導入するのは時間的には可能かもしれないが、教える体制を整備する困難もあり、十分に習得させるまでには至らないのではないか。6年生で文字を書く練習を自由に行わせるのは、新学習指導要領において「児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること」とされているが、むしろ奨励すべきことであると考ええる。

研究指定校等の先進的学校に比べ、その他の小学校では英語教育の充実が困難である。この学校間格差を是正するためには人的・予算的な配慮が不可欠ではないだろうか。人的・予算的措置がなされないまま状況が改善されるとは到底期待できない。

## 2-2. 教育内容の連携のために

小中連携に不可欠なポイントとして、小中の教員が互いの教育内容を知ることはいうまでもない。まずは、外国語活動と中学校英語科（特に1年生）の共通点と相違点の理解が必要である。

新学習指導要領において、外国語活動の指導内容は次のようにされている。

外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができるよう、次の事項について指導する。

- (1) 外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。
- (2) 積極的に外国語を聞いたり、話したりすること。
- (3) 言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること。

日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深めることができるよう、次の事項について指導する。

- (1) 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと。
- (2) 日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと。

- (3) 異なる文化をもつ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深めること。

さらに、小学校外国語活動では「外国語でのコミュニケーションを体験させるに当たり、主として次に示すようなコミュニケーションの場面やコミュニケーションの働きを取り上げるようにすること」とされる。以下がその例である。

〔コミュニケーションの場面の例〕

- (ア) 特有の表現がよく使われる場面  
 ・あいさつ ・自己紹介 ・買物  
 ・食事 ・道案内 など  
 (イ) 児童の身近な暮らしにかかわる場面  
 ・家庭での生活 ・学校での学習や活動  
 ・地域の行事 ・子どもの遊び など

〔コミュニケーションの働きの例〕

- (ア) 相手との関係を円滑にする  
 (イ) 気持ちを伝える  
 (ウ) 事実を伝える  
 (エ) 考えや意図を伝える  
 (オ) 相手の行動を促す

上で示された内容を、小学校では年間 35 時間の中で「音声面を中心に」教えるのである。中学校の指導要領と異なり、具体的な目標／言語材料は示されていない。そのあたりが小学校英語の指導の難しさではないか。しかし「コミュニケーションの場面の例」および「働きの例」（中学校指導要領では「言語活動の…」とされている）については、小中ではほぼ共通している。したがって、小学校で練習した事柄（類似した場面、類似した目的）を中学校で再び学ぶという形が出来上がっている。

小学校では 2 技能（speaking, listening）の充実を図り、その他 2 技能（reading, writing）は基本的には中学校英語科で本格的に始めることになる。したがって、中学 1 年生で初めて学習する事項は盛りだくさんである。たとえば、小学校英語では一人称・二人称までであったものが、中学校英語科では三人称を扱うようになる。あわせて三

人称単数現在が出てくる。そして現在形だけであったものが過去を扱うようになる。さらには肯定文に限定されていたものが否定文を含み、所有の表現、冠詞などもカバーするようになる。

語彙の面では小学校外国語活動においても多くの単語に触れている。それは上に示されたコミュニケーションの場面で英語のやり取りを行うのに必要な単語・表現が含まれる。例を挙げていうと、職業に関する言葉、国名、身近な生き物の名前などである。これらの中には、中学校教科書にはすぐさま出てこないものも含まれているが、多くの場合で小学校で触れた単語・表現の多くを中学校英語科で定着させることになる。中学では言葉（文字）を見て、書いて、覚えていく。

小中の教員が相互の教育内容について知った上で児童・生徒の指導を行うことによって、さらにスムーズな連携が実現されるだろう。小中連携を成功させるためには、まず小学校においては中学校から寄せられる小学校英語への期待に沿った教育を行い、中学校では言語活動を中心として英語を身につけてきた子どもの能力をさらに伸ばしていくことが必要不可欠である。そこで、つぎのセクションでは外国語活動の一部として取り入れることが可能な小学校英語の効果的指導例を提案したい。

### 3. 小中連携を念頭に置いた小学校英語の指導例

日本の小学校英語に導入できる具体的指導法として、英語のリズムの習得をまず提案したい。つぎに文字の学習に関連して、絵本による読み聞かせと自主的な読書を取り上げることとする。

#### 3-1. 音声面での指導

日本の小学校英語においてフォニックスを教えることは大変好意的に受け取られているのだが、英語の音と文字を結び付ける訓練の前に英語のリズムを習得させたい。それは、英語が大変リズムカルな言語であることと、かつ日本語と異なるリズムを持つためである。方法は小学校の授業でも既に取り入れられている歌やチャンツの最大限の活用が挙げられる。歌やチャンツは英語をリズム

で身につけるもので、必ずしも正確さを追求すべきものではなく、子どもに自信を持たせることに主眼が置かれるべきである。

英詩（歌）を例にして英語のリズムを考えてみよう。まず英詩の韻律（rhyme and meter）に注目したい。英語の詩はその多くが弱強のリズムで書かれている。高校の英語科教科書にも掲載されている詩の一節を例に挙げる。

I wander'd lonely as a cloud,  
That floats on high o'er vales and hills,  
When all at once I saw a crowd,  
A host of golden daffodils....

これは英国ロマン派詩人 William Wordsworth (1770-1850) が歌ったスイセンの詩の一節である。弱強4詩脚（iambic tetrameter）で書かれている。手拍子を打ちながら読めば、その構成は明らかにわかる。一方、わらべうたなどは強弱のリズムで書かれたものが多い。中学校の英語科教科書にも掲載されている詩を引用する。

Twinkle, twinkle, little star,  
How I wonder what you are,  
Up above the world so high,  
Like a diamond in the sky....

日本でもよく口ずさまれる「きらきら星」であるが、これは強弱のリズムとなっている。さらに、上の二つの詩行を見ると、ともに脚韻を踏んでいることがわかる。初めの例は交互韻といい、隔行で韻を踏む形になっている。1行目の cloud と3行目の crowd、2行目の hills と4行目の daffodils がそれぞれ韻を踏む。また、「きらきら星」は2行ずつ脚韻を踏んでいて、star と are、high と sky が対句になっている。

脚韻以外にも英語には頭韻がある。頭韻は早口言葉などで遊びながら身に付けることもできる。たとえば次のようなものがある。

Peter Piper picked a peck of pickled peppers;

A peck of pickled peppers Peter Piper picked.

これは p の音を語頭に用いて、そこにアクセントを置いて頭韻を踏む形をとっている。現在英国の幼児向けテレビ番組 Cbeebies で人気の歌（Baby Jake のテーマ）も同様に頭韻を踏む。

Yacki yacki yoggi - Doo doo dee!  
Bah bah bah - Beep beep, noo see!  
Yacki yacki yoggi - Moo moo moo!  
Hope you love to do it too!

特に意味のない言葉の連続であるが、耳に響く子音がおもしろい歌である。頭韻を踏むと同時に二行ずつ脚韻も踏んでいる。（dee と see、moo と too のように。）また、次のようなよく知られた言葉遊びの例もある。

She sells sea shells on the seashore;  
The shells that she sells are sea shells I'm sure.

これは頭韻を踏みつつも一種の早口言葉になっていて、日本人には不得意な“s”と“sh”の発音が繰り返されることで【s】と【ʃ】との練習としても取り入れることができる。

このように英語はリズムカルな言語であるので、英語のリズムに慣れることは、自然な英語の音の感覚を養成することにつながる。聞きなれた単語を今度は目で見ることによって、つづりと音の関係を確認することにもつながるため、フォニックス学習においても韻文を読ませることは有益となる。<sup>9)</sup>

つぎに読み聞かせの効果について述べたい。*Hi, friends* 2では桃太郎のストーリーを絵本の形で読ませている。これは大変有意義なことであると考えられる。理由は複数挙げることができるが、たとえば、必ずしもすべての子どもが大きな声で発話練習をしたりゲームに取り組んだりするのが得意ではないだろう。そのような子どもにもこの種の教材ならばなじみ易いと言える。近年英語多読による読解力育成が日本国内でも盛んに取り入れ

られているが、それと同様に、限られた語彙を用いて簡単に楽しく英文を読ませるものである。*Hi, friends!*に掲載された桃太郎のお話以外にも、類似したレベル・タイプの教材を取り入れることで、多くの子どもたちが英語の本に興味を持つことが期待される。

このような教材は子ども自身で読むこともできるが、読み聞かせを行うことも英語の感覚を育てるのに大変有用である。あらかじめ語彙に目を通しておかせ、その上で挿絵やレアリアを用いて教師が子どもたちに話を読み上げる。その際に読み手が駆使すべきテクニックは、たとえば速度、トーン、音量を変えることがある。また、登場人物に応じて声色を変える、効果音を入れる、繰り返しを行うことなどが挙げられる。<sup>10)</sup> さらにイラストやレアリアを使用することによって、子どもの関心をひきつけ、集中を持続させることができる。その他のテクニックとして、読み聞かせの際には話をスラスラ読んでしまうよりもむしろもったいぶるような雰囲気子どもに話の展開を予想させるのも効果がある。そうすることで、子どもは次に何を聞くべきであるかを自ら考えるようになる。つまりこれはリスニングのターゲットを絞らせる練習にもなる。

### 3-2. 文字学習

つぎに、文字学習について提案したい。文字の読み書きは小学校の段階で、ゲームやパズルなどを用いた形で、すべての子どもに慣れさせておきたい。小学校では音声中心の指導を行っているが、文字に興味を持つ子どもが文字を学びたいという意欲を持つとき、それを育てるべきではないだろうか。また、文字学習を中学校に入ってから行わせるのは子どもにとって実際に大変な負担がかかり、中学校での英語学習につまずきやすくなり、英語嫌いを助長する可能性が出てくる。

英語を母国語とする子どもたちは文字よりも先に音声を身につける。これは日本語を母国語とする子どもにおいても同様であるが、文字を習わせるのは平均的には就学時あるいは就学の少し前でよく、むしろ無理に文字を書かせるべきではない

という意見もある。一方で、子どもの興味に応じて文字を教える（なぞらせたりする）ことが望ましいとされる。外国語を学ぶ場合には事情が異なるわけだが、日本の小学生も高学年にもなれば文字への興味が湧くのは自然であり、その好奇心を大切に育むべきではないだろうか。学習指導要領では「アルファベットなどの文字や単語の取扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること」となっており、文字学習はあくまでも自然に習得させるのが理想的である。校内にスペースがあれば、文字・単語がイラストと組み合わせになっているような掲示物を、常に子どもの目に触れるところに設置しておくのが良いであろう。授業内においては、発話・発音の練習をするときに文字を見せながら指導することが望ましいと考える。こうすることによって、子どもは英単語のつづりが訓令式と異なることに、そしてつづりと発音の関係に気が付くはずである。

先ほど例に挙げた桃太郎のお話は文字学習にもつながる有意義な教材と言える。*Hi, friends! 2*に収められている“*We are good friends*”は9ページにわたる読み物である。日本の子どもならおなじみの桃太郎のお話を、*Hi, friends!*に出てくる表現を多く取り入れて絵本形式に作っている。限られた語数と文法で物語は展開され、子どもにとってはおなじみの（既習の）表現が盛り込まれる。たとえば

See you. See you later. Look! Here you are.  
Thank you. Take care.  
Hello. How are you? I'm good. Let's go to  
(Onigashima).  
That's OK. We are happy.

などがそうである。

子どもたちは既習の表現を今度は絵本の中に文字で見つけ、それを読み、身につけていくという、大変理想的な学習方法が提示されている。音だけでまた、そのほかにもたとえば日本でおなじみの『はらぺこあおむし』(*The Hungry Caterpillar*)や



『大きなかぶ』(An Enormous Turnip) など、すでに子どもが知っているストーリーの教材を選んで読み聞かせをしたり、さらには自分で読ませたりすると、比較的自然な形で子どもの文字への興味や理解を深めることができよう。

多読は文字学習の一端としても推奨したい方法である。これから具体的に例を挙げて示したい。ここで言う多読は、子どもが読書を始めるのにふさわしい特別な教材を使って行う学習法を指す。現在では CD 付のテキストもあり、音を聞きながら文字を見ることができる。学習とは言え、基本的に辞書は使わずに理解できるレベルの教材で進めていく。まず、オックスフォード大学出版から出されている Oxford Reading Tree (ORT) という子ども向けのリーダーを取り上げたい。80%の英国の学校でも教材として使用されているというシリーズであって、内容には子どもを引きつけるおもしろさがある。中でもキッパーという男の子のシリーズが有名であるが、このシリーズにおいては英国の一家族が主人公となり、家族(父親・母親・子ども3人)とペットが繰り返し登場して物語が展開されるため、読み手となる子どもにとっては親近感を持ちやすい。また、3人きょうだいの日常生活が描かれる一方で、彼らがファンタジックな冒険をしたりするので内容も飽きさせない。英語表現は当然のことながら日常的に頻繁に使われるものが用いられている。(一方、日本の学校の教科書の場合は習得する文法事項に合わせて教材を作成しているため、不自然な英語表現が含まれることが避けられない。)<sup>11)</sup> ORT は日本でも一般に多読教材として使用されているが、内容は子ども向けである。英国の小学生(および入学前の子ども)に合わせたストーリーになっているため、同年代の日本の小学生にも勧めたい。シリーズは段階に応じて英語の難易度が高くなっており、カバーする語彙や文法事項も配慮されている。日本の小学校英語では使われない過去形が出てくることが、強いて言えば教師が子どもへの説明に苦労する部分かもしれない。

学習効果を上げるため、子どもにはリーダーによる学習を音声教材と併用して行わせたい。読み

聞かせを常に行うのは困難であるので、CDなどを積極的に活用したい。ORTには朗読CDがあるので子どもにはそれを聞かせながら本を読ませたり、それに慣れたら本を見せずに音を聞かせたりするなどして音声に慣れさせるとよいであろう。ただし、ORTは英語を母国語としない外国人児童用に作成された教材ではないので、英語を読み上げる速度はあくまでも自然であり、必ずしもすべての子どものレベルに合ったものではない。ごく初歩のレベルを薦めたい。ステージ1と呼ばれるORTの初級レベルでは語数が大変少なく、ほとんどイラストのみで物語が展開されている。ここで言う「語数」とは、使用される単語数である。日本語の「字数」とは異なるので注意が必要である。英語リーダーの場合にはこの「語数」に加えて、「見出し語」(headwords)があるが、見出し語は登場する単語の種類の総数を指す。ステージ1+ではキーとなる平易な文が繰り返され、定着が図られる。たとえば“Big Feet”における見出し語は14語である。“Come and look at this.”という文が繰り返され、雪の中に残された大きな足跡(big feet)をつけたのは誰なのかをキッパーの家族が順番に推測する。ステージ1+のレベルは日本の小学校英語で十分にあったものとする。ステージ2は見出し語が若干増えて“The Toys’ Party”においては21語となっている。

また、オックスフォード大学出版ではオンラインで無料の英語学習教材を提供している。Oxford Owl (<http://www.oxfordowl.co.uk/>)ではORTの一部もe-bookとして利用できるようになっており、現在の機能ではタブレットでも活用できる。したがって、教室での使用にも子どもの自習にも役立つことが可能である。絵本を読むようにページをめくって中身を楽しめるのだが、同時に音声を聞くこともできるため、紙版のリーダーとCDを使うよりもむしろ手間が省けるという利点もある。ORTのキッパーシリーズのほかにも豊富な教材が用意されており、英国の学校で採用されているシンセティックフォニックスをベースにしたリーディング教材も利用できるようになっている。

## まとめ

英語教育における小中連携については様々な角度から検討されているが、地域の取り組みには温度差があり十分な連携にまで至らないケースが多い。<sup>12)</sup> 新たな科目となった「外国語活動」を、英語教育の経験を持たない小学校教諭が従来の職務に加えて担当するからには、周囲でそれ相応の体制を整えることが必要となるのは言うまでもない。十分な効果を期待するからにはまずは教師を増員することが必須となる。外国語活動にさらに付け加えるが、自治体によって予算のバランスが異なり、公立学校では外国語活動に使用できる予算が非常に少ないケースもあって、推奨されるような方法で、すなわち電子黒板・パソコン・フラッシュカードその他の教材・機材を使って授業を展開することが未だに不可能であるという例さえも耳にする。外国語活動が必修化された現在では教育の格差を是正するためにもすみやかに解決されなければならない問題ではないだろうか。たとえばティームティーチングを行う相手となる外国語指導助手との十分な打ち合わせ時間さえ容易には確保できないという現状がある。<sup>13)</sup> これはクラス担任が外国語活動以外の業務で打ち合わせ時間を確保するのが困難である上に、指導助手の派遣時間数が限定されていることが原因である。こういった問題を解決するためには外国語活動に関わる人員確保と予算の柔軟な措置が今後の小学校英語教育の充実に不可欠であることは明らかである。小中連携におけるカリキュラム作成などの段階に本格的に進むことができるのは、大半の場合はこの部分の改善があってから可能になるのではないか。

カリキュラム作成よりも前の段階の小中連携を念頭に置いたとき、小学校でできることは子どもが中学英語にスムーズに移行できるように英語を身につけさせることと言えよう。その方法として、上述したように音声と文字の学習がとくに有用であると考えられる。両方インプットを重視した学習であり、実際には分離して身につけるべきものとは言えない。音声については英語のリズムを体験させる指導を行い、自然な抑揚や強弱を感じ取らせ

ることで、子どもは日本語と異なる音の世界を実感するであろう。授業時間内にチャンツや歌を繰り返し取り入れることによって、子どもの英語のリズムの感覚を磨くことが可能である。また、発音に関しては時間が許すのであればフォニックスを取り入れるのも良いと考えるが、フォニックスに時間をかけられない学校の場合は必ずしも取り入れる必要はないだろう。中学校においては発音記号が示された上で正確な発音を勉強するのだから、小学校の時点ではむしろ小学校で習う訓令式あるいはヘボン式のつづりと本来の英語のスペリングが一致しないこと、さらに英語のつづりと発音が(訓令式的に)一致しないという事実を認識させる程度でよいのではないか。

文字学習については *Hi, friends!* の桃太郎の例を挙げたように、子どもの興味を引く教材であれば絵本などを積極的に取り入れたい。文字に慣れていけば中学英語への移行がよりスムーズになることは間違いない。中学校で生徒の負担になる学習内容の一つが文字の習得だからである。絵本は自主学習にも読み聞かせにも使用でき、様々な場面で役立てることが可能である。できれば日常生活で頻繁に使う表現、自然な口語のやりとりを用いた教材を選び、読み聞かせをしたり繰り返し読ませたりすることで、子どもは挿絵の助けを借りながら文字と音声を同時に学ぶことになる。さらには新たな本に挑戦させるのもよく、すでに読んだ本と関連した内容の本(たとえば ORT などのシリーズもの)あるいはよく知られた名作(古典や現在話題になっている本など)を読ませることは子どもを飽きさせないだろう。

平成 25 年 10 月、文部科学省が新たな方針を固めた。「外国語活動」の開始時期を現在の小 5 から小 3 に前倒しする。3、4 年次は週 1～2 回、5、6 年は週 3 回実施を想定している。また、小 5 からは教科に格上げして検定教科書の使用や成績評価も導入するという。これには早期に英語の基礎力を養う機会を設け、国際的に活躍できる人材育成につなげる狙いがあるとされる。平成 31 年までの実施を目指すというが、それまでには教科書の検定基準や評価方法などの検討、中教審の議論

を踏まえた学習指導要領の改定など、多くの課題をクリアする必要がある。しかしそれ以上に現場の教員にとっては大きな課題が押し掛かることになる。小中連携を意識した英語教育法についても、国の方針が変わるたびに柔軟に考え対応していかなければならない。いわば正解のない問いに対し、その答えを求める作業を地道に継続するのみである。

## 主要参考文献

- 大塚 謙二 他 (2012) 『成功する小中連携！生徒を英語好きにする入門期の活動 55』 明治図書。
- 木塚 雅貴 (2008) 『小・中連携を「英語」ではじめよう！—「小学校英語」必修化へ向けて』 日本標準。
- 白井 恭弘 (2012) 『第二言語習得論入門』 大修館書店。
- 樋田 光代 (2008) 『小学校英語ポップ・ステップ・中学！—小中兼務で見た、これからの小学校英語と入門期の中学校英語』 文溪堂。
- 直山 木綿子 (2013) 『小学校外国語活動のあり方と“Hi, friends!”の活用』 東京書籍。
- 樋口 忠彦 他 (2010) 『小学校英語教育の展開』 研究社。
- 古川 昭夫 他 (2007) 『イギリスの小学校教科書で楽しく英語を学ぶ』 小学館。
- 松香 洋子 (2007) 『小学生のフォニックス』 mpi。
- 松川 禮子 他 (2007) 『小学校英語と中学校英語を結ぶ—英語教育における小中連携』 高陵社書店。
- 萬谷 隆一 他 (2011) 『小中連携 Q&A と実践 - 小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ 40 のヒント』 開隆堂。  
<http://www.kairyudo.co.jp/general/data/contents/02-chu/eigo/h24/h24-renkei.pdf>  
 (開隆堂 SUNSHINE 小中連携についての資料)

## 注

- 1) 新学習指導要領における外国語活動の目標は「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」となっている。
- 2) アンケート結果によると「外国人と友達になったり、外国のことをもっと知りたいか」との問いには、小6の71%、中3の61%が肯定的な回答をしている。ちなみに、授業や習い事などで英語を学び始めた時期について、小学校入学前と小1、小2と答えた小6は42%で、中3が23%であるのと比較して、早い段階から英語を学び始めている実態が明るみになった。その一方で内向き志向にはあまり変化がなく、将来留学

したいと希望する児童生徒の割合はともに30%台にとどまった。

- 3) 本論考は平成25年8月2日、山梨県中巨摩地区外国語活動研究会（於：昭和町立西条小学校）で行った講演内容をもとに新たな知見を加えてまとめたものである。
- 4) 山梨県中巨摩地区でも小中連携が行われているものの、ウの範疇に入る連携までにはなかなか至らない現状であると拝察する。
- 5) 木塚 雅貴 (2008) 『小・中連携を「英語」ではじめよう！—「小学校英語」必修化へ向けて』 日本標準より。
- 6) また、現実的な別の問題として、地理的に連携先と比較的離れている場合などは、連携先の学校まで移動しての交流が時間的に困難になることも考えられ、たとえば平常の授業期間中に生徒と児童の交流を実現することは容易ではない。
- 7) [http://benesse.jp/berd/center/open/report/syochu\\_eigo/2011/soku/pdf/soku\\_all.pdf](http://benesse.jp/berd/center/open/report/syochu_eigo/2011/soku/pdf/soku_all.pdf) 参照。
- 8) 参考：松川 禮子 他 (2007) 『小学校英語と中学校英語を結ぶ—英語教育における小中連携』 高陵社書店。
- 9) 一方、チャンツも大変有用とされ、日本でも長く取り入れられているが、これはそもそも1970年代から実践されている英語学習法の一つであり、Carolyn Graham が提唱した。特に子供が英語を学習する際に有益なチャンツを著書 *Jazz Chants for Children* (Oxford UP, 1979) で紹介したが、今ではチャンツの古典とも言うべきテキストとなっている。
- 10) 山梨県立大学において平成25年1月～2月にかけて小学校外国語活動指導者のためのセミナーを開いた。これは地域研究交流センター共同研究プロジェクト「山梨県内の小学校英語教育における指導者の養成と研修に関する研究」（研究代表者：高野美千代）の一環で行ったものである。講師はTEYLの先駆的研究機関である英国ヨーク大学から招聘した。その際の講演の中では、絵本の読み聞かせが子どもの英語力養成に有効であることが繰り返し強調され、また指導者が実践できる読み聞かせのテクニックの説明がなされた。また、その際に児童英語教育の専門家であるPie Corbett氏の読み聞かせおよび彼が推奨する教授法“talk for writing”の紹介も行われた。Corbett氏の読み聞かせの様子はYou Tubeなどオンラインで参照することができる。ただ、現時点における日本の小学校英語では三人称や過去形を基本的に教えていないし、書かせるのも文字単位あるいは決まった単語程度であるので、“talk for writing”を導入するには残念ながら今のところは困難な状況である。
- 11) オックスフォード大学出版によると、ORTが大阪市小・中学校英語教育指導重点校用の教材として採用されることになり、大阪府が今年改定した「市教育振興基本

計画」案を基に指定された公立小学校 19 校において、全 3 年生～6 年生を対象に授業内で使用されるとい  
う。(http://www.oupjapan.co.jp/gradedreaders/ort/ 参照)

- 12) 松川 禮子 他 (2007) 『小学校英語と中学校英語を結ぶ  
—英語教育における小中連携』高陵社書店は様々な側  
面から小中連携を研究した結果の分析あるいは実践の  
報告等を掲載しており、特に有用である。
- 13) これらの情報は平成 23 年度に実施された K 市内での  
公立小学校教諭を対象とするアンケート調査の結果  
(非公開) を基にしている。